

「和習」言説と江戸中期における詩風の革新

フィンク ウィクトル

「和習」とは、現在の日本文学研究で、漢文や漢詩が標準を逸していることを指して使用される用語である。中国古典の散文や韻文の文法や語彙の規則に反する間違いや、古典の先例よりみれば異質である景物や主題がそれに相当する。特に漢詩を解釈する際、「和習」が分析用語として用いられる。

漢語の不十分な能力や、日本語と中国語の間に位置する「廻還顛倒」の訓読によって形作られた習慣にその原因を求め、単なる誤謬ではなく、漢字圏の周縁部に特有な現象として初めて捉えたのが荻生徂徠である。徂徠は、将軍家の付近を離れて間もない頃、伊藤仁斎の儒学への批判を展開した『護園随筆』の附記である「文戒」で、「和習」を「和字」や「和句」とは異なる語弊として定義した。「和習」という造語の背景には、儒家の学問紛争があったわけである。

「和字」や「和句」という用語が、現在の研究へは受け継がれず、「和習」のみが受容された理由としては、山本北山の詩論『作詩志穀』でその語が度々登場する事実が考えられる。北山は、徂徠が起こした護園学派が「剽竊の悪詩」の流行を招いたとして、その門人の太宰春台と入江南溟を名指しして、その詩題を「倭習誤用簇々として目に充つ」ものとして批判するにあたって、徂徠の造語を論争の武器とした。

異質性から日本（語）的特質へ、という「和習」の捉え方の変遷に焦点をおいてドイツ語で執筆した論文「和習用語の由来と受容」（『文論』ハイデルベルグ大学、2020年11月）とは視点を変え、本発表では「和習」言説と当時の詩風変化の関連について論じる。『作詩志穀』は、日本漢詩史からみれば江戸中期の革新期に刊行された著作である。松下忠が詩壇の爛熟期として位置づけ、揖斐高はパトス溢れる漢詩から「日常的な現実」に注目する作品へと移る時期だとしている。また儒家的存在を離れた詩人の誕生をこの時代に求める論考もある。詩家より詩論家であった北山の格調説批判と「和習」言説が、詩の革新で果たした役割を考察していきたい。『作詩志穀』の中でも、特に詩史について記した「詩変総論」や「和習」をめぐる指摘がなされる「附録」の論点を分析しながら、転換期の新趣の詩の出現との関連を考える。

The Discourse on Japanese Peculiarities (*washū*) in Classical Chinese Poetry and the Renewal of the Poetic Form during the Mid-Edo Period

Fink Victor

Washū is a term used in contemporary studies of Japanese literature to designate aberrations from the norms of Chinese prose or poetry. Errors pertaining to grammar and vocabulary of poetic and prose texts, as well as *realia* or *sujets* not found in Classical precedent, fall under this category. *Washū* is predominantly employed as a term of analysis when dealing with Classical Chinese poetry, or *kanshi*.

Ogyū Sorai was the first to theorize about insufficient aptitude in the Classical Chinese idiom as well as habits stemming from “upturning the texts” via glosses for easier reading in the vernacular (*kundoku*) as its causes, recognizing it as being a unique phenomenon on the periphery of the Chinese orthographic sphere rather than seeing it as a question of simple inaccuracies. Not long after the end of his direct service to the Shogunal family, Sorai wrote *Bunkai* as an appendix to *Ken'en zuihitsu*, a critique of Itō Jinsai’s Confucian thought. In it, he posits *washū* as a defect of language to be distinguished from both incorrect use of characters (*waji*) and shortcomings of syntax (*waku*). A scholarly disagreement among Confucianists thus provided the backdrop to the concept’s creation.

The reason that neither *waji* nor *waku* were received into the vocabulary of contemporary research while *washū* itself was, may be found in Yamamoto Hokuzan’s usage of the term in his work on poetics, *Sakushi shikō*. Hokuzan attacked Sorai’s school for having brought about a wave of “inferior, epigonic poetry,” mentioning in particular his disciples Dazai Shundai and Iri’e Nanmei, criticizing their poems’ subtitles (*shidai*) as “swarming with *washū* and mistakes wherever one looks.” Sorai’s neologism became an invective.

In this talk, I do not want to lay out the process of scholarly re-interpretation of *washū* moving from deviancy to Japanese peculiarity as I have done in an article I published in German last year. The argument concerns instead the relationship between the discourse of *washū* and changes in poetic form. *Sakushi shikō* was published during a period of renewal in the history of the *kanshi* during the mid-Edo period. Matsushita Tadashi called this the period of maturity for poetic circles, while Ibi Takashi saw a transition from *kanshi* bursting with pathos to *kanshi* focusing on everyday reality. Yet others proposed that the birth of the poet removed from Confucian preoccupations took place during this time. I will consider the meaning of the discourse of *washū* in the context of this renewal of poetry as found in Hokuzan’s criticism of Classicism (*kakuchō*). Especially the chapter “On the Historical Development of Poetry” (Shihen sōron) and the remarks on *washū* in the appendix of *Sakushi shikō* will be my themes in thinking about the relationship between the new poems of a period of change and Hokuzan’s own poetics.

一 日本の漢詩史について

日本における漢詩の歴史を概観するにあたっては、古代の近江・平安の朝廷に基礎が築かれ、中世より僧侶が主役として交代し、江戸に幕府が開かれて後は儒学の隆盛にともなうて文人ないし詩人が誕生するに至るという構図を採用すれば、重要な詩人の社会的背景に注目して変遷を把握できる。

新釈漢文大系の『日本漢詩』の序で猪口篤志氏もこういった枠組みで貴族より僧侶、僧侶より儒者へ詩魂が流れていく単略漢詩史を展開する。貴族と僧侶との間では、作詩において憧れの対象となる中国古典の詩歌が異なるが、自立した作風と独特な詩意は欠けているという点で両者は一致する。雪村友梅や義堂周信のように一部の禅僧を除いて、日本漢詩の作者たちは模倣的な作品を多く残してきたと主張する。両者が六朝の詩人、白樂天、東坡などの作風を脱しえなかったように、江戸初期もまた手本が変われども独創の域に達しない。猪口氏は明示しなくとも林羅山などを念頭においての評価であると考えられる。

そこに氏は二つの転換期を設ける。一つめは荻生徂徠の始めた語学、そして徂徠学派が明の先学が鼓吹する盛唐の詩風を拮据したことによる知的土壌の生成。二つめには山本北山と葛蠹庵（とあん）を宋詩の提唱者としてあげる。日本漢詩の頂点を、その「蒼雅剛健」とした、つまり成熟して立派な姿をこの前後の時期に据える論調である。この頂点は松下忠がその大著『江戸時代の詩風詩論』でいう江戸中期から後期にかけての「詩壇の爛熟」に相応する。「爛熟」とは漢詩の流行、折衷的といえども時流な詩論の出現、詩人の交流が盛んになり結社しての活動と作品の出版の活性化を一括しての表現である。杉下元昭氏もまた海量の詩「登富士嶽」を引きながら、唐詩スタイルの上辺の下に隠れる写実的で実体験に基づく新しい風情を中期の漢詩の特徴とする。

揖斐高氏に至っては豊富な作例をあげて詩人の「個我」と伝統的な詩形の縛りとの関係を論じて、また詩人を文人と捉えて享保年間の文学界の雅俗の軸を基本とする隠逸思想を指摘し、そこで初めて当時における自己の表現、またその表現の自由の意味が明らかになる。こうした漢詩研究の進展と響応して、英語圏で 90 年代にブームとなっていた江戸思想史研究の一旦を担ったピーターノスコ(Peter Nosco)氏も江戸中期の詩風の革新を引き合いに個人性(individuality)の歴史を分析した論著を近年学界に問うている。

猪口氏による大胆にも千年以上に渉る日本の漢詩を対象とした意味では「剛健」という相応しい詩史論に戻って考察してみれば、江戸中期が古代・中世に勝る詩の真の姿が現れる時期とされるのが窺える。漢詩の歴史の上で画期となるこの時期の特徴、そしてその過程における徂徠、北山の役割は如何なるものであり、漢詩の発展の思想史的、社会学的な条件とはどのようなものであったのか、という問題をとりあげていく。

二 徂徠の文章論

日野龍夫氏が著すところの『徂徠学派』に、徂徠学派の漢文学の経文の学について、現代で考えられている「文学」という言葉で描写できる文章へ至る変遷における役割があったと指摘されて久しい。江村北海の『日本詩史』（明和八年 1771）がすでに「海内翕然として風靡雲集し我が邦の芸文これが為に一新」したと述べており、江戸中期当時、すでにその刷新的な影響力が認識されていたことがわかる。徂徠の護園学派が発足するのは柳沢吉保への奉公を終えた宝永六年（1709）であり、徂徠自身の学説を世に知らしめる『護園随筆』を出版したのは五年後の正徳三年である。徂徠の出発地点に位置するこの著作は伊藤仁斎の儒学を批判し、復古学（古文辞学）の立場を明確にして、理と氣と情の関係、道と人文（人間の行為の領域）などを論じたものではあるが、ここではその思想面の検討をあえて省略して、付録として添えてある「文戒」に注目する。

題の通り仁斎を戒めるための彼の文章の批判である（正確には仁斎の他に山崎闇斎と独庵玄光の二人も批判の対象となっている）。「故に和訓の牽く所、字は其の字に非ず。語理錯[□]して、句は其の句に非ず。二者の病、或は指摘すべきこと無きが若くなくとも、篇章の間、實に其の弊を受くるは、往往に之れ有り。」と徂徠はいう。つまり訓読の習慣によって字を間違えたり、句を作り損なったりすることを仁斎の文章の「病」とする。

ただ漢文を日本語に直して生じる誤謬であることに変わりはなくとも、この両者のいずれにも属しない類の間違いもまた存在し、「篇章の間」の問題もある。それは「和習」というものであって、「其の語氣・聲勢の中華に純ならざる者」として徂徠は定義する。詳細にみると「不在」と「非」、「見」と「視」「観」や「固（まこと）」「誠」のように日本語での読み方が同一であって、漢文で区別される具体的な表現と象徴的な表現を混同させることがあげられる。

また「蓋」「夫」「者」のような助詞を日本語のそれと同様に多く入れて乱用すること、「使」「會」「可」のような動詞に掛かる助動詞の位置を日本語文の順序に習って間違えることが批判される。和字と和句の別は理論上画然としていても、実際徂徠の用法が一律ではなく句法の誤謬と考えられるものも用字の誤謬とされることもある。

「和習」までくるとその区別は益々恣意的であるという印象がある。「而」と「則」の多用を戒めることなど、「語氣・聲勢」で定義した用語の曖昧さが目立つ。そこで興味深いのは、徂徠が文法と語彙の概念を超えた「何か」を「和習」によって捉えたことにある。日本へ伝わった字にはそもそも文の伝統も付随しており、現地の言語と次第に文字化される現地文化とが複雑な発展をとげてきた歴史がそこに潜んでいる。「中華」らしさはものの見方や想像の世界にも当然感じられるべきもので、そういった理想としての中華からの逸脱には、同じ中国古典のテキストに立脚しても二つの文化の間に違和感が看取されるわけである。

「文戒」に説かれる三つのカテゴリーは全て訓読に由来するという点は、徂徠流の語学論の特徴をよく現している。『訳文筌蹄』の序にも「廻還顛倒」や「和訓廻還讀」という語でテキストを直接ではなく訓点を用いた現地語への読み替えを問題とする。漢籍の学習手段としては妥当であろうとも、あくまでも方便としての訓読を徂徠は論じる。こうした徂徠の理論とともに新しい学派の出発が、彼の仁斎への批判の背景にはある。論争というより一方的な攻撃に終わって、晩年徂徠自身も「少なからず道を害する」エピソードとして後悔する。

三 反徂徠学と詩風の革新

天明三年(1783)に江戸の「儒裏俠」山本北山が『作詩志穀』を著す。四年前の著作『作文志穀』の経文論につづいて詩文論を展開する。詩文が流行する世間に対して、北山は自身の見解を示す必要を感じたのであろう。十八世紀前半にはすでに京都の幽蘭社(元文元年 1736)や大阪の兼葭堂会(宝暦八年 1758、享保十一年(1726)公認の兼葭堂の詩人会)が存在し、後半になると各地に詩社が興り、有名なものには宝暦十三年(1736)設立の京都の賜杖堂や大阪の混沌社(明和二年 1765)がある。江戸にもまた天明六年(1786)に市河寛斎が盟主である江湖詩社が開かれる。こうした世紀末の詩壇が北山の著作の背景をなす。題名の『作詩志穀』は『孟子』にみられる弓射手の羿の逸話を引いており、修行には弓に矢をつがえて弦を最大限までひくが如く目的を必ず達成しようという緩まない意気込みが必要であるとする、一種の完璧主義を典拠とする。

構成としてはまず詩型(仄起平起、排律、押韻)と構成(起承轉合、聯句)より説き起こし、北山が是とする袁宏道が代表する明の公安派の性靈説を解説し、その優秀性を格調詩十首との比較によって立証する。その次には個々の詩選と詩話をあげて評価をくだし、合間に詩人についてのコメントを挟む、「徂徠詩道を知らず」といった題のように護園批判が主である。最後に「詩変総論」一章において、付録に徂徠と南郭の文章の「誤謬」、「詩誤」を糾す。本編の最後に置かれてある「詩変総論」に北山は中国の詩史を鳥瞰して次のように解説する。「六朝餽釘ノ習ヲ矯ムルニ流靈ヲ以ッテス。…盛唐ノ詩起ル…声律風骨備る矣と云るは是ナリ…矯ムルニ闊大渾成ヲ以ス、然レドモ、盛唐ノ美ハ盛唐ニ尽キテ復作ルベカラズ、強テ渾成ヲナサントスルトキハ、却テ委弱風骨ナシ、故ニ中唐の詩情実ニ専ラナリ…故ニ晩唐ノ人、奇僻ヲ以テ勝ントス…宋ニ至テ東坡欧陽大ヒニ旧習を変ジ、法トシテ取ラザルナク…滔滔莽莽トシテ江河ノ若シ」。袁宏道の『雪濤閣集序』を踏まえた論述である。

上にあげた日本詩史の概観と比較しても面白い点はいくつも考えられるが、構造の上で『史記』などにみえる王朝交代に基づく周期的な時間の概念、いわゆる易姓革命を詩の美学に当てはめて形容詞のペア(餽釘・流靈)で盛衰を表象することが目に付く。そういった歴史の思想に、また北山は自らの時代を照らし合わせ、腐敗した剽窃に余る詩壇の革命を精霊詩のもたらす清新さに望んだ。

北山が痛烈に批判し詩史の革命によって取り除かれるべきと考えた徂徠学を、彼は『作詩志穀』の付録で文章論の立場より反駁する。それにあたって北山は呆れた師匠のポーズをとって、詩集に収められた作品自体を読むよりは目を少し通しただけでダメだと分かったというふうに詩題にのみ批判を加える。徂徠の門人の文章の批判には紹介してきた「和習」用語がしばしば登場する。「藩職」という字の使用や「新入封」といった言い回しで殿様の所領への初めての訪問を表したこと、また詩題の長すぎることで見出される。中国と日本での違った政治体制を考慮しない言葉遣い、和歌集にでもみえるような長く続く詩の解説となる序文の異様性を指摘するものである。

「和習」は徂徠の学問では重要な語であったともいえない。『訳文筌蹄』その他の著作では「和弊」、「和語」や「侏離鳥言」(異族の言葉や動物の鳴き声のような意味の通じないもの)のような遠回しの表現をつかって語弊を指す。北山が敢えて「和習」の造語を用いた理由には、論敵の言説が論敵自体に当てはまるという皮肉を込めた攻撃、そして和習用語が字面よりも理解が平易であって、恐らく読者でもある程度知られていた語であったことが考えられる。徂徠が古義学批判に際して造語した言葉を北山が護園学派の批判に

転用したことになる。徂徠派の詩を明の精霊説のレンズを通して誤った昔日への恋慕と理解し、それを超越すべく袁宏道の詩話を援用し徂徠とその門下を攻撃した『作詩志穀』、それは日本漢詩史の過渡期に位置しその影響は重大であったとしても、より大きな詩風の変化の一部にすぎない。反徂徠学の先駆けとなる儒者の中井竹山や石川麟洲の延長線上に北山の詩論が存在する。詩の革命の実現と称しうる作品は北山自身の手によって詠まれることはなく、その出現は次世代の詩人を待たねばならなかった。護園学派が門人を縛らない学風、言語への深い関心、そして経文を基本としながらも詩作を推進したことによって培われてきた知的土壌に開花した詩壇が、詩風の変化を求めて中国詩話の受容と学派論争の過程を経て新境地に定着した歴史が、「和習」言説を考察して関連づけることで、凝縮した形でみえてくる。

参考文献

- 揖斐高 編『市河寛斎 大窪詩仏』（江戸詩人選集 5）（岩波書店 1990 年）
揖斐高『近世文学の境界 個我と表現の変容』（岩波書店 2009 年）
揖斐高『江戸の文人サロン—知識人と芸術家たち』（吉川弘文館 2009 年）
猪口篤志 編『日本漢詩』（新釈漢文大系 45/46）（明治書院 1972 年）
大森林造『大窪詩仏の詩と書』（<http://saki-archives.com/shibutsu.html>）（2010 年）
杉下元明『江戸漢詩 影響と変容の系譜』（ぺりかん社 2004 年）
中村幸彦 編『近世文学論集』（日本古典文学大系 94）（岩波書店 1966 年）
松下忠『江戸時代の詩風詩論—明・清の詩論とその摂取』（明治書院 1969 年）
山本嘉孝「山本北山の技芸論—擬古詩文批判の射程」（『近世文藝』99 号 2014 年）